

2003 年 度 東京外国語大学 総合文化研究所 活動報告

公開講座

「世界の神々」

10月8日～11月12日 全6回

主催 総合文化研究所

西永良成、水野善文、岡田知子、栗田博之、

八木久美子、渡辺雅司

特別学術シンポジウム

「《記憶の場》の問いから

——想起すること / 忘却すること / 叙述すること——」

11月22日

共催 総合文化研究所／海外事情研究所

協力 駐日フランス大使館

後援 朝日新聞社

協賛 岩波書店

ピエール・ノラ（アカデミー・フランセーズ会員）、
イ・ヨンスク（一橋大学）、成田龍一（日本女子大学）、
西永良成、鈴木茂、孫歌、工藤光一、岩崎稔

映写会

「映像から観る台湾」

5月14日～12月10日 全6回

主催 台湾文化研究会

後援 総合文化研究所

学術講演会

「香港文学に関する諸問題」

12月11日

梁秉鈞（香港嶺南大学）

共催 中国語研究室 総合文化研究所

「読むことと書くこと」

3月4日

リュドミラ・ウリツカヤ

主催 総合文化研究所

シンポジウム

「台湾、アイデンティティのゆくえ」

12月13日

主催 台湾文化研究会

後援 総合文化研究所

辻昭二郎（熊本大学）、小出正之（映画監督）、

佐藤公彦、三尾裕子、蕭幸君、中山智香子

編集後記

線はなぜ引かれ、境界となるのか。私たちの日常生活のなかにも、越えてはならない（越えることのできない）線はおびただしく存在する。そして、線＝境界は、禁止ないし禁忌という抑圧や命令をはらむために、かえってその侵犯に対する欲望をつねに誘い出している。だから、〈越境〉という行為には、人間の強さと弱さをめぐる根源的なドラマが立ち現れるのだ。〈越境〉はある意味で、人間の宿命であり、あるいは人間そのもの（あるいは生けるものみな）の基本的な条件とさえいえるかもしれない。世界の神話や伝説で、繰りかえし語られる禁忌と侵犯のモチーフも、ミハイル・バフチンが中世・ルネサンスの文化やドストエフスキーの小説をモデルに明らかにしたカーニバル論も明らかに〈越境〉の本質に根ざすものだ。しかし他方、そうした境界そのものや、境界を越える行為のもつ意味が、かつてのように一義的ではなくなり、たえず変化や流動性にさらされつつある事実にも目を向ける必要がある。人、情報、資本、ウイルスを含めた文化総体が向かいつつある世界化の流れのなかで、いったんは消え去るかにみえた境界が、これまで以上にホットで神経症的なトピクスに変貌しつつある。『総合文化研究』第7号では、そうした〈境界〉と〈越境〉がはらむ問題をめぐって、所員の先生方から、それぞれの専門領域に即した力強い論考を頂くことができた。微力ながらも、本特集の企画立案に携わったものとして、厚く御礼申し上げる。また、私たちの総合文化研究所において、本テーマが、今後も持続的な関心の対象となることを心から願う。

本号の編集実務は、研究所の優秀な補佐たちにすべてをお任せすることになった。岸井紀子さん、福岡由仁郎君、栗山陽子さんの三人の献身的なお仕事ぶりに心から感謝したい。

（亀山郁夫・関口時正）

Trans-Cultural Studies No.7
総合文化研究 第7号

2004年3月18日発行

責任編集 亀山郁夫

編集スタッフ 吉本秀之 岸井紀子
栗山陽子 福岡由仁郎

発行 東京外国語大学 総合文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電話 042-330-5409

Fax 042-330-5410

Web <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ics/>

印刷 (株) 寿工業写真社
東京都北区滝野川1-90-8